

インターネット日本語学習コミュニティにおける参加者の協働学習 —翻訳活動をめぐる参加者の変容—

齊 茜芸

キーワード

学習コミュニティ, 翻訳活動, 協働学習, 変容, 自律学習, 思考力

はじめに

近年, インターネットの普及により, 学習者が自分の翻訳文を他者と共有し, 翻訳に関する意見を交換しながら言語を学べるような学習コミュニティが数多く現れてきた。教室内の教師主導の学習と異なり, 自由に参加し退出でき, 好みの方法や内容が選択でき, 同じ趣味を持っている仲間と協働的に学習できるオンラインコミュニティに参加したことで, 学習者が自律的かつ継続的に日本語を学習する様子が観察されている。本研究は筆者が立ち上げた日本語翻訳学習コミュニティの参加者が翻訳活動を通し, 継続参加動機及び翻訳活動に対する考えをどのように変容させていったかについて考察することを目的とする。

1. コミュニティの概要

本研究が対象とするコミュニティは添削者, 添削研修者, 翻訳者, 翻訳研修者とリーダーという5の役割で構成されている。参加者は全員中国語母語話者である。翻訳者S⁽¹⁾は必ず自分が所属する添削者S⁽²⁾を持ち, 常に自分の疑問に答えてもらったり翻訳文を添削してもらえたりする。同じ学習者同士がお互いに教えたり教えられたりして, 共に成長できる仕組みになっている。

各役割にはそれぞれの権限と責務がある。リーダーは「応募者への評価」「添削者の育成」「参加者全員の管理」という主に3つの業務に携わっている。添削者は2～4名の翻訳者S⁽¹⁾を担当して, 翻訳任務を配布し彼らの翻訳文を添削しアドバイスをする責務と, 添削者の素質がある有能な参加者を見つければ, リーダーに推薦する責務がある。一方, 担当している翻訳研修者が翻訳者のレベルに達した時に, レベルアップさせる権利と好みの作品を翻訳対象として選択できる権利がある。添削研修者は1名の翻訳者を担当する以外に, それまで所属していた添削者から任務を受けながら, リーダーからの研修を受けることになる。

翻訳者と翻訳研修者は両方とも添削者から任務をもらい, 翻訳を中心にして活動している。後者と違い, 前者は自分の担当者以外の者からも任務をもらい, 好きな作品を選び, 直接リーダーに添削者へのレベルアップ申請をすることができる。

図1-1に示したようにコミュニティの活動方法は個人・チーム・コミュニティ全体と3

つあり、どれにおいても他者と協働しながら、翻訳活動を遂行する。

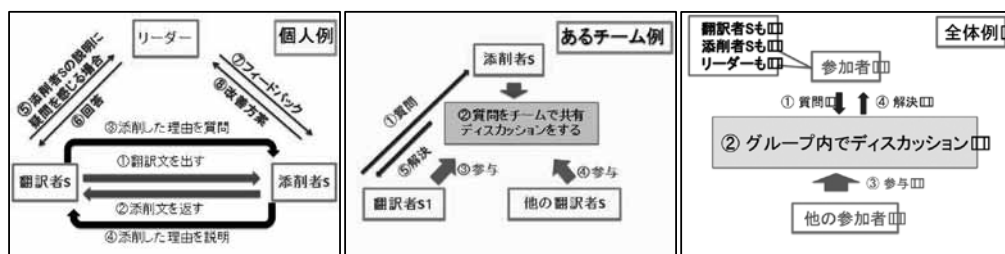


図 1-1 活動方法

2. 先行研究

情報通信技術の発展により、コンピュータを使用した協調学習支援が様々な教育機関で導入されてきている。中原ら（2002）は、電子掲示板で相互評価を行うことができるシステムを開発し、学習者はシステムを積極的に利用していたことがわかると述べている。また、高木ら（2007）は、相互評価システムを開発し、システム運用の結果、学生同士の対話が増え、学習意欲が向上したと述べている。宮副（2014）はメール討論・スカイプ会議等の手法を用いてヴァーチャル映画討論会を実施した。

しかし、これらの研究はほとんどが教育機関内で行われたものであり、学習者が強制的に参加させられたケースが多い。高橋（2014）は教室を離れ、オンライン上にコミュニティを作成し、参加者は周囲に日本語母語話者が全く存在しない状況でも日本語学習への意欲を失わず、自律的に学習を続けられることを実証したが、参加者の特性についての分析に留まり、参加動機に関しては触れていない。従って、学習意欲の観点からのコミュニティへの参加動機に関する研究の蓄積は少ない。さらに、学習者同士が協働的に学び合う活動を通し、互いに様々な影響を与え合う過程で参加動機が変わると推測され、この変容も学習者の学習意欲を左右する要因となると思われる。

3. 先行調査

筆者はコミュニティに参加している参加者を対象とし、計32名に参加動機・継続参加動機・学んだことと3つのポイントを中心にSNSツールのチャット機能を利用してアンケート調査を実施した。質問項目は表3-1の通りである。

表3-1 アンケート調査の質問

- ① あなたはなぜこのグループに参加しましたか
- ② なぜ、現在もこのグループに参加し続けていますか
- ③ グループ活動を通して学んだ事を教えてください

また、アンケート調査から得られたデータを分類し、中に現れた重要な情報を抽出してコード化した。そのコードを表3-2にまとめた。括弧の中の数字はコードが出現した回数である。

表3-2 アンケートの調査結果

参加動機	日本語能力の向上 (15), 趣味 (7), 翻訳の練習 (9), 友達作り (3)
継続参加動機	日本語能力の向上 (5), 友人 (5), 趣味 (3), 居場所 (6), 帰属感 (1), 責任感 (2), 達成感 (1), 習慣 (2), 時間の余裕 (1), 翻訳の練習のみ (1)
学んだこと	翻訳能力 (11), 日本語能力 (16), 中国語能力 (9), 語彙量 (8), 友人 (5), 責任感 (1), 思考力 (1), 就職 (1), 教え方 (1), 帰属感 (1), 居場所 (1)

表3-2で示したように、参加者の「参加動機」は概ね4つに分けられる。その動機は概して自分のための要因が多く、いわば自分の成長を目指している人が多い。しかし、「継続参加動機」コード数は倍以上に増えている。特に「日本語能力の向上」の代わりに「居場所」や「責任感」など参加動機のコードと合致しない要因が著しく増えていて、継続するうちにコミュニティへの帰属感を感じるようになり、単純に自分の能力を向上させようと思って参加しているわけではなくなっていることがわかる。また、「学んだこと」には参加動機で期待していた「日本語能力の向上」と「翻訳の練習」に関する言語能力だけではなく、「思考力」や「責任感」などの抽象的なコードも含まれている。「グループにいる私」というアイデンティティもグループに参加するにつれて成長していると考えられる。例えば、グループ活動に参加することにより、自分が翻訳することについての迷いから抜け出し、自分の将来を真剣に考えている人がいるので、彼らの将来の就職にも役に立つかもしれない。

つまり、たとえ同じ動機を持っていても、グループ活動に対する異なる理解により、生じた変容も異なる。この変容の実態を把握・解明するために、インタビュー調査を実施した。

筆者は2014年11月から2015年5月にかけて、面談あるいはSNSツール通話の形式で合計4名の参加者に半構造化インタビューを実施した。大まかな質問のポイントは表3-3の通りである。アンケート調査の質問に類似しているポイントもあるが、アンケート調査の回答に沿ってさらに深く詳しく聞いた。表3-3は4名の調査対象者のインタビューの実施日・形式・場所・録音時間を示している。

表 3－4 インタビュー調査概要

調査対象	実施日	形式・場所（ソフト）	録音時間
TX007	2014年11月15日	面談・TX007の家	30分34秒
TX006	2014年12月9日	SNSツール通話・YY	1時間34分39秒
HY001	2015年5月1日	面談・箱根のある旅館	45分20秒
HYK003	2014年12月8日	SNSツール通話・QQ	30分59秒
TX006&HY001	2015年5月1日	面談・箱根のある旅館	35分45秒

4. 考察

4.1 翻訳において不可欠なモノ

ある程度の外国語能力を身につけると、漠然と「翻訳を通して外国語能力をもっと向上させたい」という考えを持つ人が多くなるようである。翻訳には「外国語能力」が最も重要だと当然のように思う人も少なくない。要するに、「良い翻訳者＝外国語能力が高い人」と思いがちだが、果たしてそうだろうか。

コミュニティには「日本語能力の向上」という動機を持ち、参加する人がほとんどである。翻訳を通して日本語能力の向上を目指す人は、自分の能力がもう既に翻訳という行為を実行できる条件を満たしており、自分が翻訳できると思いつく傾向がある。言い換えると、自分の日本語能力なら、日本語の文が読め、母語である中国語に翻訳することは容易いことだと考えがちである。その上で、翻訳することで新しい日本語の語彙を学んだり、文法を復習したりすることにより、更なる日本語能力の向上という目標を目指そうとするのである。すなわち、参加者達は、翻訳においては外国語である日本語能力が最も不可欠なモノだと強く信じているのである。

データ 4－1 TX001のアンケート回答

たくさん勉強した。例えば、翻訳とはある言語の文を文法と語彙の並び通りに他の言語に対応する言葉に変えるだけではなく、人物の性格・言葉の特徴などの事も含め、適切な言葉で表せなければならない。語彙の意味が最もあっても、一番適切な語彙とは限らない。

TX001は「人物の性格・言葉の特徴等のことも含め、適切な言葉で表せなければならない」と語っている。「適切な言葉で表す」とは適切な中国語で表すということである。辞書の中に表示された日本語語彙に対応する中国語ではオリジナル作品が伝えるものが十分に伝えられないため、人物の性格・言葉の特徴をよく考えた上で自分の理解を加えて適切だと思う中国語を選択し、翻訳文を作成することが良質の翻訳だと結んでいる。

日本語の小説・マンガを読む際に未知の語彙があった時、辞書の解説を見るとすぐ自分の頭の中で理解はできるが、同時に中国語に翻訳することを考えると脳内で浮かんだいくつかの語彙から選択して並べなければならない。だが、浮かんだ語彙が最も相応しいものとは限らないし、さらに脳内で対応する中国語の語彙が浮かばない場合もある。すなわち、脳内に蓄えられている中国語知識の蓄積量が翻訳された中国語の文章の質を左右していることがわかる。

データ 4-2 TX005のアンケート回答

たくさん学んだ。最初に入ったときはまだ日本語式な中国語と私たちが普段喋っている中国語が全然分けられなかったが、TX002のおかげで現在もうすっかり理解できるようになった。

「日本語式な中国語」と「普段喋っている中国語」の区別が分かったとTX005は述べた。では、普段喋っている中国語と日本語式な中国語はどこが違うのだろうか。例えば、「まあまあ」という語彙は日本語ができる人が頻繁に使う語彙で難しくないが、この語彙と対応する中国語には「马马虎虎」ということわざがあるが、それほど頻繁に使用されている話し言葉ではない。「まあまあ」を「马马虎虎」と翻訳したら、話がやや硬くなる感じがおり、一部の人は「まあまあ」を中国語の中の同じ発音の「嘛嘛」に音訳する傾向がある。

一方、「まあまあ」のように対応できる中国語の翻訳がある語彙に対して、少なくともそのまま直訳する方法もあるが、俗語・若者言葉のような日本語に特有な語彙の中には、いくら辞書を調べてもなかなか意味・解説が見つからない語彙がたくさんある。翻訳するたびに、自分の理解を加え、脳内で適切な中国語を選択しなければならない。全く頭の中に相応しい語彙が浮かばない場合があれば、それは自分の知識不足で、更なる勉強が必要だと推測できる。例えば、HY008は翻訳文の質を向上させるために、中国語能力を鍛えたという。

データ 4-3 HY008のアンケート回答

中国語の翻訳文をもっと美しく流暢に表現するために中国語の四字熟語や美しい文章を復習し、中国語能力も鍛えていた。

日本語能力以外に、中国語能力も翻訳文の質に大きな影響を与えることをHY008は翻訳活動を通して理解した。また、よりよく美しい翻訳文を追求するために中国語に関する知識も復習している。ここでは「学習」ではなく、むしろ「復習」といったことから、HY008は以前も中国語の四字熟語や美しい文章を学習していたことがありと推測できる。

小学校であろうと、中学校であろうと、国語の授業で母語を使って作文を書かされた経験はだれにもあると思われる。教師が作文に点数を付けるので、より高い点数が取れるよう

に、四字熟語などを使用し、レベルの高い作文を書く人もいる。翻訳という作業では作文を書くことと同じく、豊富な中国語の知識がめられると考えられる。

では、翻訳する際に翻訳において不可欠なモノは中国語能力であると言えるだろうか。大量の中国語知識を身につければ、良質の翻訳文が作成でき、逆に中国語知識量が少なければ、いい翻訳文が作れないのだろうか。

データ 4-4 HYK001のアンケート回答

自分の中国語能力の低さを感じた。特にタイトルの翻訳が難しかった。簡潔に翻訳することができなさそうだ。

中国人で自分の中国語能力が低いと思う人はあまりいないと思うが、HYK001は翻訳することを通して中国人でも母語である中国語が自在に使いこなせているとは言えないことを実感した。この意見は前述した中国語の重要性を示すものである。

一方、「自分の中国語能力の低さを感じた」という意見以外に、「タイトルの翻訳が難しかった」とHYK001は述べている。確かに日本の小説やマンガでは、たまに変わった日本語でタイトルを付けることがある。中には作者が自作の語彙を使用していて、対応する中国語の語彙がないため、翻訳することが実に難しい場合もある。

例えば、周知の「ドラえもん」に対応する中国語の訳名はいくつかある。香港の出版社は「叮当」と訳した。香港人は首に何かお守りのようなものを付けることで平和を祈る習慣があり、ドラえもんの首に鈴が付いているから、そのまま名付けたという話であった。しかし、中国本土の人はそのような習慣がほとんどないので、香港版の翻訳語は理解が困難であるので、「ドラえもん」は本土では「机器猫」と翻訳されることが多い。ドラえもんは元々ネコ型のロボットなので、そのままロボットに対応する「机器」とネコに対応する「猫」を組み合わせ、キャラクターの性質を重視して翻訳しているのである。

上述の例から、2つの中国語表記のタイトルにはともに翻訳者の思いが込められ、意味深いタイトルであるが、実際に1997年以降の正規出版物においては、最も普及している「ドラえもん」に近い発音の「哆啦A梦」に統一されている。良し悪しは判断できないが、どのタイトルも非常に難解で学術的に高度な中国語を使用したわけではなく、一般読者が周知の語彙を使っていることがわかる。翻訳者達がそれぞれの考えを持っていた為、全く違った語彙を選択して異なる中国語表記タイトルに翻訳された例と言える。

総じて、翻訳において不可欠なモノは日本語能力または中国語能力のどちらか一つではなく、2つの言語能力を支え、翻訳を可能とする思考力であると言える。HY012の回答も思考力の重要性を示している。

データ4-5 HY012: 学んだことに対する回答

自分がどのような翻訳文が良い翻訳文と思っているかと、自分がどのような翻訳文を求めているかの2つのことをちゃんと考えるようになった。

マンガや小説等は全てメディア作品である。メディア作品を理解するにはその作品の言語だけがわかっていても内容を全て理解したとは言えない。その上、翻訳する際に文脈に沿った理解と母語でのアウトプットも必要だと思われる。前述した内容を見れば、少なくとも3つの段階があることがわかる。第一に、日本語のメディア作品を日本語として日本語の文脈を理解する。第二に、それを中国語の話者が理解できるような文脈と中国語に翻訳する。第三に、全体を見直して、日本語が分からない中国語話者でも理解できるような完成度が高い中国語のメディアリソースとして作品を提供する。

グループXの参加者達は活動への参加で3つの段階を繰り返し鍛えることを通して、翻訳において最も不可欠なモノに対する見解も変容している。その変容は彼らの日本語学習の変化も示唆しているのではないだろうか。

4.2 翻訳することでリラックスする

E. L. デシ (Edward L. Deci) (1975) は、動機を内発的動機づけと外発的動機づけに分けている。内発的動機とは、関心があるから勉強する、面白いからやるということである。外発的動機は、学習本来の目的ではなく報酬、賞賛、叱責回避などが目的となる。例えば、第二言語である英語を学び始めた時の動機を考えてみよう。いずれの国においても英語は、学校の必須教科として教えられているので、学校で良い成績を取りたい、という一般的な動機がまずある。また、入試の科目として避けて通ることができないため、外発的な学習動機が高くなるだろう。

本論文の研究対象であるコミュニティの参加者は日本語能力の向上や趣味などの参加動機をもち、自発的に参加した。つまり日本語を中国語に翻訳することの価値が自明なため、二つの言語の習熟を目指す内発的動機づけがあったともいえる。また、この動機を継続させるのは参加者自身がコミュニティの活動—「翻訳」ということ—toに長期的に興味を持たなければならない。たとえば、翻訳することを通して、うれしい気持ち・楽しい気持ちなどを感じ、それによって、翻訳することを好きになる必要があるのである。

翻訳は楽しい、少なくとも私にとっては。しかもおもしろい。なぜかという、原作に拘束されながらも翻訳という作業を通じて自己を表現できるからであると尾島 (1997: 7) は語っている。また、翻訳を楽しみと感じる理由について、「自己表現」以外にも、作業しながら自分の考えを深めていくチャンスが多いこと、最初は漠然とした文章が、少しずつ姿を現してくることなどを挙げている。では、コミュニティの参加者たちは翻訳することをどのように思っているだろうか。まず、HY001とTX006の発話を見てみよう。

データ 4－6 TX006 & HY001のインタビュー

発話	発話者	発話内容（日本語訳）
70	調査者	翻訳することが楽しいの？
71	HY001	<u>翻訳する時は結構楽しい。</u>
72	TX006	まあまあ。
73	調査者	何故？
74	TX006	<u>単純に翻訳することが好き。</u>
75	HY001	<u>私はマンガが好き。</u>
76	TX006	<u>特に円滑に翻訳しているとさらにうれしくなる。</u>
77	HY001	<u>うん、難しい問題がなく順調に翻訳できるときに…</u>

HY001は「マンガが好き」で、つまり翻訳する内容に興味があり、TX006は「単純に翻訳することが好き」で、つまり翻訳という行為に興味がある。参加動機はともあれ、二人は「順調に」、「円滑に」翻訳という行為を繰り返しているうちに楽しくなり、活動参加への意欲が維持されている。では、なぜ楽しみと感じているのだろうか。

外国語を学び始めた際に、教室以外の場所で知っている単語を見るたびに、「その単語を私は知っている」という自己効力感を感じられる人が多い。それは、初心者の中には外国語能力が低いため、単語の意味を自分の母語と照らし合わせ、母語と第二言語の意味を確認することにより、自分の母語の力で外国語を理解するという達成感を感じられるからである。逆に、外国語に慣れるにつれ、母語で意味確認することも少なくなり、初心者である時の達成感もだんだん消えてしまう可能性も高い。

しかし、翻訳する時は強制的にTX006とHY001が熟知している母語と勉強中の第二言語である日本語の間で行ったり来たりして意味を確認することができる。また、マンガというのは視覚情報を与えるので、たとえ単語を知らなくても文脈で理解できる文もある。後に辞書で確認し、自分が推測している意味と同じだったらより一層達成感を感じられる。さらに、教師がいない環境で、自分で答えを見つけることにより、より大きな自己効力感が得られる。このような自己効力感、あるいは達成感についてHYK003も自分の意見を述べた。

データ 4－7 HYK003のインタビュー

発話	発話者	発話内容（日本語訳）
221	調査者	ほかには？（日本語能力の成長について）
222	HYK003	うん、結構楽しんでいる。翻訳することが非常におもしろい。 <u>一つの文章を翻訳し終えるたびに達成感を感じ、また一つ任務をやり終えたよう</u>

		な気分だ。
223	調査者	苦しいと思わない？
224	HYK003	いいえ、 <u>楽しくて面白い</u> と思うからグループXへ参加した。前も任務が少なくてやることがないから、ほかの任務があるかなあって聞いたじゃない？誰もやりたくない任務を私に任せてほしいよ、 <u>もっともっとやりたい</u> 。
225	調査者	さっき達成感といったよね
226	HYK003	うん。
227	調査者	翻訳できることでうれしい？
228	HYK003	そう！（笑） <u>日本語の文章を中国語に翻訳するとうれしくなる。</u>

教室では学習者が教師から課題をもらい、それを完成することから達成感を感じており、会社では、上司から仕事を任せられ、それをやり遂げたり、給料をもらったりすることで達成感を感じている。しかし、それらは報酬、賞賛、叱責回避などが目的の外発的動機づけにより、やらなければならないから実行したわけであり、教師や上司に「あなたはよくできた」とほめられたりし、何かが終わった時に感じる達成感である。すなわち、外的要因が大きく、内的要因が少ないと言える。学習者でも、社員でも、もし同じ作業を繰り返してやらせていると、いずれその作業に飽きてしまい、不満な気持ちが表れる恐れがある。

一方、前述したように、コミュニティは参加退出自由であり、繰り返しの翻訳活動から得られるのが達成感のみだとしたら、参加者はこのように長期的かつ積極的には参加しないと思われるが、HYK003は「もっともっとやりたい」と語っている。それは、手元の翻訳任務を終えても、次の任務に期待を持っているので、翻訳活動の「達成感」がそう簡単にはなくなるからだともいえる。すると、HYK003が話した「達成感」は、学校の課題や仕事を終えた時の達成感というより、自分の能力で日本語の文を中国語に訳することで自己表現ができ、自分の考えも深められるという「満足感」の方が適切ではないだろうか。誰かが給料をくれたり、ほめたりしてくれるような外発的動機づけではなく、内発的動機づけが情意面の満足感を支えているのだと思われる。

ところで、ひと月の任務完成量が決まっているコミュニティ活動への参加は、時間に相対的に余裕がある学生にとっては達成可能だろうが、すでに就職している社会人にとっては負担が重いと推測される。情意面の満足感だけで、参加者は参加動機を本当に継続できるのだろうか。長期的に参加し続ける理由について、社会人であるTX007は下記のように述べた。

データ 4－8 TX007のインタビュー

発話	発話者	発話内容（日本語訳）
71	調査者	最初は暇だったからグループXへ参加したが、現在は負担になってない？
72	TX007	ない、 <u>趣味だからね</u> 。趣味は負担ではないだろう。もしこの趣味が負担になってしまったら趣味ではなくなるのではないだろうか。
73	調査者	毎週任務があることがちょっときついなあと思う人がいる。あなたは？
74	TX007	確かにそういう人もいる。もし催促されたらそう思うかも。しかし、 <u>任務を完成することが趣味だと考えたら、この行為自体が負担ではなく、リラックスだ。</u>
75	調査者	そうね
76	TX007	たとえば、映画を見るような <u>リラックスと似ている。翻訳することでリラックスするだろう。</u>

休日の活動と聞かれると、映画をみる、テニスをする、買い物するなど、様々な活動がある。さらに、その理由について分析を深めると、好きだから、趣味だからという答えが出てくるだろう。TX007にとって、翻訳することは映画を見るのと同じく、空いている時間に自分をリラックスさせる趣味であり、負担ではないのである。つまり、社会人のTX007にとってはたとえコミュニティの活動が大きな負担になっても、それでも続けられるのは情意面の満足感が得られるからだと思われる。翻訳するたびに得られる精神的な満足感がやり続けたい理由である。

学習者は自分の言語習得のために何らかの学習ストラテジーを使っている。その中には感情的な環境に働き掛ける情意ストラテジーがある。たとえば、自己評価に関する感情について人と話すことや自分の満足感を利用することや意識的にリラックスすることなど（宮崎・ネウストプニー1999）というものがあげられる。TX007の場合はまさに情意ストラテジーが働き掛けているのではないだろうか。

4.1でも述べたように、翻訳において不可欠なモノに対する参加者の見解が「日本語能力⇒中国語能力⇒思考力」のように変容していることが分かる。教師不在の環境で、日本語の文章を中国語に翻訳することで参加者は独自に自分の日本語能力・中国語能力・さらに思考力を確認できる。また、それを繰り返すことを通し、自己表現ができ、自分の考えも深められ、自らが考え出して翻訳したものが自分の知的財産にもなる。つまり、力を持っているのは教師ではなく、自律的な学習者である私だということを認知することを通して、情意面の満足感を得て、リラックスするのではないかと考えられる。

4.3 学問の道には終りがない

参加者はなぜコミュニティに参加したのかと考えると、前述した分析・考察から、要約す

ると「日本語能力の向上を目指す」と言える。言語教育では「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」と四技能があるが、参加者達はいったいどのような能力が向上していると自己評価しているだろうか。まずTX006の回答を見てみよう。

データ4-9 TX006のインタビュー

発話	発話者	発話内容（日本語訳）
199	調査者	単純に翻訳することで日本語能力を向上できると思って参加したわけ？
200	TX006	そう、日本語を勉強したら、 <u>翻訳者になってもいいなあ</u> と思い、練習しようという気持ちで参加した。確かに進歩している！ <u>クラスでは私の読解力が一番だよ。</u>
201	調査者	いろいろな面で向上しているの？
202	TX006	<u>読解力は確実に向上した。特に文を読むときに、助詞を細かく確認するようになった。</u> 長文だったら、助詞一つ間違ったら全部翻訳を間違えるかも。

翻訳に必要なものは何だろうか。河野（1975：132）は、『翻訳上達法』にこう書いてある。

翻訳技能上達のためにはどうすれば良いか？その答えは極めて簡単である——外国語の読解力を高めることと、母国語の表現力をつけること。これ以外にはない。

4.1でも論述したように、参加者達はコミュニティの活動を通し、翻訳には母語である中国語能力も不可欠なモノだと思えるようになった。中国語能力に堪能になるには、中国語で書かれたものを多く読んで、「四字熟語や美しい文章表現」を適切に覚えることと思われる。では、外国語の読解力を高めるためにはどうすればよいだろうか？河野（1975：132）はまた、その外国語で書かれたものをたくさん読むことであると述べている。

実際に、TX006も翻訳活動を通して、日本語で書かれたものを多読し、自分の読解力を向上させている。「翻訳者になってもいいなあ」と発言した彼女にとっては、翻訳することで読解力が向上し、また、高めた読解力を翻訳することに応用し、更なる高い目標を目指していると考えられる。

さらに、TX006は「助詞を細かく確認するようになった」と語っている。普通に日本語の本を読む場合、意味の理解に支障がでる未知の単語を調べたりすれば、何となく全体の意味を把握できるので、助詞をそこまで細かく確認しない人が多い。しかし、書く・話す場合には、助詞をおろそかにしてはいけない。助詞を1つ間違ったら、文の意味が全部変わってしまう恐れがあるからである。学習者は助詞を初級から学び始めるが、超上級になっても、使い方をすべて把握しきれない傾向がある。TX006が助詞を細かく確認できるようになった

ことは、今後、読解力のみならず、作文力に対しても、聴解力に対しても良い影響を与えると考えられる。

一方、使い方が把握しにくい助詞と違い、意味を全く類推できない単語と遭遇したら、どうするのだろうか。HY001はこの質問について、以下のように答えている。

データ 4-10 HY001のインタビュー

発話	発話者	発話内容（日本語訳）
155	調査者	単語がわからない場合にどうする？
156	HY001	以前はよく調べていた。
157	調査者	今はもうやらないの？
158	HY001	そう、でも普段きちんと単語を暗記している人より私の単語量は元々少ないから、彼らが調べなくてもわかる単語でも私は <u>調べなければならぬ</u> 。また、翻訳することが、 <u>辞書で単語を調べるという習慣をつけさせるようになる</u> 、自分の想像で単語を理解するだけでなく…
159	調査者	翻訳する時に単語の意味が確認できない場合、文脈で想像する…
160	HY001	<u>想像する！</u> しかし文脈で意味を確定する場合はこう翻訳しても本当に大丈夫だと思うときだけだ。ほかは人に聞いてもいいじゃん！うちの <u>グループではたくさん翻訳者と添削者がいるから、会話チャットがあるのでは？そこで聞けば？</u>

外国語学習者にとっての語彙量は自分の外国語能力のレベルに直接に関わるものである。普段あまり語彙を暗記していないHY001にとって、大多数の人が知っている単語でも知らない可能性が高いため、翻訳し始めた時には頻繁に辞書で調べていたという。外国語の文を読む際に、未習の単語と出会うと、手間がかかると思い、辞書に頼らず文脈で単語の意味を類推する人もいる。

特に難解な語彙が多い小説などを読む場合に、未知の単語をいちいち調べると、相当な時間を要し、辞書にも載っていない可能性も高いため、自分でその単語の意味を推測して理解する方が、スムーズに読めると思うかもしれない。しかし、自分が推測したものが本当に適切なのだろうか。1人で読むだけの時はまだ他人に影響を及ぼさないが、翻訳する場合には、想像だけに任せれば読み手に間違った意味を見せる恐れがある。このような懸念を抱え、HY001は把握できない単語をきちんと辞書で調べる習慣を身につけた。

さらに、グループXというコミュニティでは添削者と翻訳者が普段交流するためのチャットグループもある。独力で問題を解決するだけでなく、他者に疑問を投げかけることで多くの意見が得られ、勉強にもなる。同じコミュニティの中で、参加者が仲間として助け合い、その協働的な助けから、全員の翻訳能力を高くしている。HY001のように一人ず

つが責任をもってレベルをあげれば、グループ全体のレベルが上がるともいえる。単語を調べたり、意味を確定したりするのは確かに手間がかかるが、様々な手段でわからない単語が分かった時の喜びは、何ものにも代えがたいほどうれしだろう。

ところが、どれだけ言語能力が高い人にとっても誤訳は免れない。例えば新参者の翻訳者達だ。HYK003が日本語能力の成長の面から次のような意見を述べている。

データ 4-11 HYK003のインタビュー

発話	発話者	発話内容 (日本語訳)
181	調査者	自分が翻訳した文を添削者にたくさん添削されてうんざりと思わない？
182	HYK003	いいえ
183	調査者	思わないの？
184	HYK003	添削された部分なの？
185	調査者	そう
186	HYK003	全然！いったいどこが間違っ添削されたかをきちんと確認するだけ、 <u>間違ふことはイコール自分がそれだけ進歩できることだと思う。</u>

中国で、小学校から大学まで共通している授業は自習である。近年、自律学習をめぐる様々な研究が盛んである。Littlewood (1999) は自律をその程度によって行動型自律と反応型自律の2種類に分けている。行動型自律は、学習者が自分で学ぶ対象を決め、アプローチを選択し、評価も自分で行うものである。反応型自律は教師によって、進むべき方向や方法は示されるが、その後は学習者がそこに向かって進み目標を達成する自律である。

我々は教室で教師の指示の下で何らかの目標を決め、優秀な成績を取るために努力している。しかし、社会に出ると、確実な目標を定めてくれたりし、やっていたことに対して評価をする教師がいないので、我々は自分に頼るしかない。HYK003は添削された部分に対して自分が成長できる部分だという前向きな認識を持ち、真面目に添削された文をチェックしている。これはまさに自分が自分に対して行う評価ではないだろうか。

人間は間違い続ける中で成長する。彼女は自分の間違いを素直に受け入れ、また今後の成長の土台と見なしている。このように学習においてイニシアチブをとる人々は、教師のもとに座って受け身で教えられることを待っている人々よりよく学ぶと思われている。ところが、「HYK003は新参者で元々日本語能力がそこまで高くないので、積極的に自分の間違いを認め、学んでいく。高い日本語能力を持つ参加者はそのように思わない可能性もあるのでは？」と言いたい人もいる。日本に10年滞在し、すでに添削者であるTX007の発話を見よう。

データ 4-12 TX007のインタビュー

発話	発話者	発話内容（日本語訳）
143	調査者	日本語能力もずいぶん高いと思うが、マンガなどを翻訳してもあまり成長しないと思わない？
144	TX007	いいえ、 <u>学問の道には終わりが無い</u> 、きっと何か学べる。
145	調査者	そう。
146	TX007	マンガでも一冊一冊の内容が異なっていて、様々な知識が含まれている。少し <u>勉強になる</u> 。

中国では「学无止境」という四字熟語があり、「学問の道には終わりが無い」という意味である。しかし、固定的な分野に関する知識は一定程度使いこなせれば、自らの変化の速度は、学習開始の初期と比べて遅くなっている。よって、自分自身の変化に応じた学習という意味でいうと、熟達してからは、それほど学習する必要は生じない。特に、自分の日本語能力が日本での日常生活に支障がない場合、一生それで足りるとみなし、学習し続けることの重要性をほとんど感じない人も多い。だが、TX007はその重要性を痛感し、さらに「学問の道には終わりが無い」という発言をしている。

生涯学習とは、人々が自発的意志に基づいて、「自己の充実」「生活の向上」、「職業能力の向上」のために、自ら学ぶ内容を選び取り、充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習であると香川ら（2008：3）は定義している。参加者達は自分の内発的な学習動機でグループXというコミュニティに参加し、自ら学習の目標・内容を決定し、終わりのない学問の道を歩み続けている。これはまさに生涯学習の好例と言える。

おわりに

本論文では一般的に認識されている学習の場所「教室」とは異なる学びの場、インターネットにおける日本語翻訳協働学習コミュニティの活動を中心に考察した。日本語能力を向上させるには日本語知識を大量に覚えて使いこなせば済むという伝統的な考え方を持っていた参加者がコミュニティ活動への参加を通し、母語の重要性に気づき、今まで言語学習において重視していなかった思考力の重要性まで分かるようになったことを論じた。

また、参加者達は自身の趣味として、母語と日本語の意味を確認することで満足感を感じているうちに、本来重苦しい印象が持たれる翻訳活動を、リラックスできる娯楽に変化させている。喜びの体験を多く積み重ねることで、コミュニティに参加し続けている。さらに、読解力を中心に日本語能力も順調に向上し、様々な手段を駆使し、これまで獲得するのが難しいと思われたような知識も調べ、身につけるようになった。参加者達は参加初期のように漠然と日本語を学習しようとしているのではなく、自ら学習の目標・内容を決定し、生涯にわたって自律的に学び続けているのである。

今後、翻訳活動における参観者の変容に加え、参加者がお互いに与えた影響についても調査していきたいと考えている。

付記

本論文は、筆者が2015年度に桜美林大学大学院言語教育研究科・日本語教育専攻に提出した修士論文に基づき、執筆したものである

注

- (1) 翻訳者S: 翻訳者と翻訳研修者の両方を指す。
- (2) 添削者S: 添削者と添削研修者の両方を指す。

引用文献

- 尾島恵子 (1997) 『楽しい翻訳』 明和印刷株式会社.
- 香川正弘・鈴木真理・佐々木英和編 (2008) 『よくわかる生涯学習』 ミネルヴァ書房.
- 河野一郎 (1975) 『翻訳上達法』 講談社現代新書.
- 中原淳・浦嶋憲明・西森年寿・鈴木真理子・今井靖・山際耕英・永田智子 (2002) 「相互評価機能を実装した電子掲示板の開発と評価」『日本教育工学雑誌』 26, 33-38.
- 高木正則・田中充・勅使河原可海 (2007) 「学生による問題作成およびその相互評価を可能とする協調型 WBT システム」『情報処理学会論文誌』 48(3), 1532-1545.
- 高橋敦 (2014) 「グローバルネットワーク時代における「新しい日本語学習者」とオンラインコミュニティへの需要」『桜美林言語教育論叢』 10, 139-156.
- 斉茜芸 (2016) 「CSCL 環境における協働学習コミュニティの考察—なぜ彼らは日本語翻訳学習グループ X に参加し続けるのか—」 桜美林大学大学院修士論文.
- Littlewood, W. (1999) Defining and Developing Autonomy in East Asian Contexts. *Applied Linguistics*, 20, 71-94.
- 宮崎里司・J. V. ネウストブニー (1999) 『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論にむけて—』 くろしお出版.
- 宮副ウォン裕子 (2014) 「ヴァーチャル映画討論会の言語の社会化」『言語教育研究』 5, 1-12.
- デシ, E. L. (1975) *Intrinsic Motivation*. New York: Plenum Press.